

# 解かれた象

寺田寅彦

青空文庫



上野うえのの動物園の象が花屋敷はなやしきへ引つ越して行つて、そこで既往何十年とかの間縛られていた足の鎖を解いてもらつて、久しぶりでそのそと檻おりの内を散歩している、という事である。話を聞くだけでもなんだかいい気持ちである。肩の凝りが解けたような気がする。

事実はよくわからないが、伝うるところによるとこの象は若い時分に一度かんしゃくを起こして乱暴をはたらいた事があるらしい。それがどういふ動機でまたどういふ種類の行為であつたかを確かめる事ができないのであるが、ともかくも、普通の温順なるべき象としてあるまじき、常規を逸した不良な過激な行為であつた事だけは疑いもない事であるらしい。そういう行為をあえてするという事は、すなわち彼が発狂している事の確かな証拠であるところいう至極もつともらしい理由から、彼は狂気しているという事にきわめをつけられた。その結果として、それ以来はその前後の足を、たしか一本ずつ重い冷たい鉄の鎖で縛られたままで、不自由な何十年かを送つて来たのである。

鎖は足に食い込んであの浅草紙で貼はつただんぶくろのような足の皮は、そのために気味悪く引きつって醜いしわができていた。当人は存外慣れてしまったかもしれないが、はたで見る目には妙にいたいたしい思いをさせた。いつたい夜寝る時には、あの足をどういふ

ふうにして寝るのだろうという事が私にはいつでも起こる疑問であった。事によるとああやって立ったままで眠るのではないかとも考えられるのであった。

檻おりの前に集まる見物人の中には、この象の精神の異状を聞き知っているものも少なくなかった。「オイオイ、なるほど変な目つきをしてやあがるぜ」などと話し合っているのを聞いた事もあったが、そう言われればなるほど私にも多少そう思われぬ事もなかったが、その目つきがはたして正常な正気の象の目つきとどれだけ違うかを確かめる事は私にはできなかつた。

果てもない広い森林と原野の間に自在に横行していたものが、ちよつとした身動きすら自由でない窮屈なこういう境遇に置かれて、そして、いくら気の長い、寿命の長い象にしても、十年以上もこうして縛られているのでは、そう面白い目つきばかりもしてられないではないかという気もした。そしていったいなんのために縛られているのか象にはそれがわからない、たとえそれがわかつて、それを言い解くべき言葉を持たないのである。あまりきげんのよい顔もできない道理である。

動物園で長い間気違いとして取り扱われて来た象が、今度花屋敷へ嫁入りする事になった。そして花屋敷の人間が来て相手になつてみると、どうもいっこう気違いらしくなくて

普通の常識的な象であるという事になったそうである。これは新聞で見た事であるから事実はどうかわからない。しかしそういう事は事実有りうべき事だろうと思われる。もし事実だとすると、これはどう解釈されるべきものだろう。実際昔発狂していたのがいつのまにか直っていたのであるか、あるいは今でもやはり気違いであるけれどもその時に発作が起こらなかつたというだけであるのか、それもあるいはそうかもしれない。しかしまた元来少しも狂気でないものを、誤つて狂気と認定されて今日に至つたものかもしれない。万一そうであつたとすると象にとつてははなはだしき迷惑な事であつたと言わなければならぬ。

この問題に対してなんらかの判断を下しうるためにはまず第一に動物特に象の精神病に関する充分な学識が必要であり、第二にはこの象が狂気と認められるに至つた狂暴な行為に関する正確な記録の知識が必要である。第三には彼がそういう行為にいずれに至つた動機といきさつについて充分な参考材料が必要である。

不幸にして私にはこれらの必要条件のどれもが具備していないから、従つて私はこの具体的の場合についてなんらのもつともらしい想像すら下すだけの資格もない。

しかし私はただ一つの有りうべき場合として次のような仮想的の事件を想像してみた。

この象は始めから狂気でもなんでもなかったのである。至極お心よしの純良な性質であった。ただあまりに世間見ずのわがままおぼっちゃんの象であった。それでこの見知らぬ国へ連れられて来て、わずかの間に、相手になる日本人の気心をのみ込んで卑屈な妥協を見いだすにはあまりに純良こうしよう高尚こうしようすぎた性質をもっていたのである。ところがまたこの象を取り扱う人間もまたあいにくきわめて純良で正直であって、この異郷の動物の気持ちなどをいろいろと推測してそれに適合する事をあえてするにはあまりに高い人格を持っていたのである。こうした二つのものが相接触すればいつかはけんかになる事が当然すぎるほど当然な帰結である。

それでどうとう感情の背反が起こって来た時に、これが両方とも人間であるか、あるいはいつその事両方とも象である場合にはかえって始末がいいかもしれないが、困った事には一方が人間で一方が象であったのである。一方は口がきけてそして仲間がおおぜいいるのに、一方は全く口がきけなくてそしてただの一人ぼっちであった。これが大なる不幸のおもなる原因であったのである。

けんかをする時にはだれでも少しぐらゐは気が狂っている。そしてお互いに相手の事を、あいつは気違いだと触れ回つてもたいてい聞く人のほうで相手にしないから、結果はそれ

きりでなんらの後難をひき起こす恐れがない。

ところが現在の仮想的事件の場合においては、象が人間の言う事を聞かないから人間がおこった、それから象がおこったのであつても、その人間が仲間の人間にこの事件の顛末てんまを話して聞かす時には、きつと象がおこった事実の記述のほうに念が入り過ぎて、ついで象がおこるに至つた原因のほうの説明を忘れがちになるのである。これを聞く人のほうでももちろん象の恐るべき行為で頭の中がいっぱいになつてしまつて、象をおこさせた人間の行為などはとても考えている余裕のないのが普通であらう。たまにはそこまで立ち入つて考えうるだけの能力をもつた人があつても、直接なんら利害の関係のない象のためにそれを考えてやるだけの暇いとまをもたないのが通例であらう。

それで結局、なんらの異議もなくこの象は狂気しているという事が人間の仲間から仲間へと伝えられる。その間に象の狂暴な行為はいろいろに誤り伝えられるが、そのたびごとに少しづつ悪いほうへ悪いほうへと変化して行くのが通則である。

この善良な人間たちは暇に任せて象のその後の行動に注目する。そうして彼らの期待に合うような象の行為を発見する事の満足を求めようとするのである。その満足が得られない場合には、それが得られそうな機会を積極的に作る事さえいとわれない。なるほどこいつ

は氣違いだという事がふに落ちるまでは安心ができないのである。考えてみるとはなはだ不可思議な心理ではあるが、ひつきょう畢竟は人間がその所信に対する確証を求めようとするまじめな欲求にほかならないかもしれない。

それはどうでもいいが、この場合迷惑至極なのは象である。腹が立つても、どうする事もできないところへ、こういう境遇に置かれてプレジデイスのめがねの焦点になつては全くやるせない。もしも一つ所に象の仲間がおおぜいいて、そして仲間どうしで話をする事ができたらそれならなんでもない。そうなれば象仲間て人間のほうを氣違いにししてまつて、そして象どうしで仲よくしていればよいのであるが、悲しい事には、この象にはそういう自分の世界が恵まれていなかった。

この場合象が氣違い扱いを免れる方法はただ一つしかなかった。すなわち多数者たる人間と妥協する事であつた。不幸にしてこの象はそれをあえてするにはあまりに正直で善良であつたのである。その結果はあのとおりである。

これはただ一つの有りうべき場合の想像に過ぎない。しかしもしこの想像がほんとうであつたとしたら、今度は思わぬ機会で今までとはちがつた人間の群れの中に迎えられて、そうして、氣違いでないあたりまえの象として見られ取り扱われるようになった事はこの

象にとってどんなにうれしい事であつたらう。想像するだけでも私は胸の奥底まで晴れ晴れとすむようないい心持ちがする。

事實は全くどうかわからない、ただ以上のような場合が今後にもありうるものとすれば、私は多くの善良な象のためにまたその善良な飼養者のために、これだけの事を参考のために書いておくのもむだな事ではあるまいと思つたのである。

(大正十三年二月、女性改造)



# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第二巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 解かれた象

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>